

【 125 】

氏 名	上 村 孝 夫
	うえ むら たか お
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 285 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	医 学 研 究 科 外 科 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	性 steroids の向性腺直接作用に関する実験的研究

論文調査委員 (主査) 教授 西村敏雄 教授 稲田 務 教授 岡本耕造

論 文 内 容 の 要 旨

著者は特に性 steroids 大量長期投与の性機能抑制機転における性 steroids の向性腺直接作用を追究せんとした。

実験対象を規則正しい性周期の発来をみる成熟雌白鼠と、生後約3週間目(離乳直後)の未だ性周期をみない幼若雌白鼠に分け、先ず成熟雌白鼠を用いて estradiol benzoate あるいは progesterone を大量長期間投与してみたが、これによって上位中枢を介して性機能が抑制されると同時に、性腺の gonadotropin に対する反応性そのものも抑制され、これが向性腺の直接作用によることが明らかとなった。

次いで性周期をみない幼若雌白鼠を用いて、成熟雌白鼠と同様の方法で、同様のことを検索したところ、幼若雌白鼠でも成熟雌白鼠と全く同様の成績がえられた。

これを更に脳下垂体剔除成熟雌白鼠を用いて検討したところ、全く同様のことを確実に実証できた。従って著者の投与量および投与方式に関する限り、規則正しい性周期の発来をみる成熟雌白鼠でも、未だ性周期をみない幼若雌白鼠でも、更に内因性 gonadotropin 分泌のない脳下垂体剔除成熟雌白鼠でもこれら投与対象による質的相違はみられず、estradiol benzoate あるいは progesterone の大量長期間投与による性機能抑制機転において、gonadotropin に対する感受性低下が関与し、これには向性腺直接作用が意義を有しているものであり、この実験的事実は性機能不全の gonadotropin-steroids 併用療法において、銘記すべきことを強調した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

著者は estradiol benzoate あるいは progesterone の一定量をそれぞれ成熟雌白鼠、幼若雌白鼠、脳下垂体摘除成熟雌白鼠に対し連日長期間にわたり投与し、この際に一定量の gonadotropin を負荷した場合、脳下垂体卵巣系における機能がいかに変わるかを検討したのである。すなわちそれぞれの場合につき脳下垂体前葉重量ならびに gonadotropic potency, 卵巣重量ならびに卵巣における ascorbic acid重量、

total cholesterol 重量, ester cholesterol 重量の消長をそれぞれ10日ないし20日にわたり追求し, 実験材料の条件差いかんにかかわらず gonadotropin を負荷すると脳下垂体性腺系機能は抑制され, この際の抑制機転そのものにおいて性腺そのものの gonadotropin に対する感受性低下が有意義な役割を演じていることを推論したのである。この事実は性腺機能そのものの低下のある場合に行なわれる gonadotropin steroid ホルモンの併用療法に対し新たに有意義な示唆を与えたものといえることができる。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。